

ザ・インタープリター

2005(平成17)年5月22日鑑賞(三番街シネマ)

★★★★



監督＝シドニー・ポラック／出演＝ニコール・キッドマン／ショーン・ベン／キャサリン・キーナー／ジェスパー・クリステンセン／イヴァン・アタル／アール・キャメロン／ジョージ・ハリス／マイケル・ライト (UIP 配給／2005年アメリカ映画／129分)

第4章

そろそろ勉強の時間

……テーマは、アフリカの架空国家マトボ共和国の大統領暗殺の陰謀。その真相究明のためには複雑なアフリカの政治情勢の理解が不可欠。スクリーン上にはじめて登場する国連本部を舞台として、国連通訳の女性とシークレット・サービスの捜査官との間で展開される息づまる攻防は、ニコール・キッドマンとショーン・ベンの迫真の演技と相まって、実に見事なもの。アフガン戦争、イラク戦争の中で注目度が高まっている国連を舞台として、こんな壮大な社会派ドラマをつくりあげるハリウッドの底力にビックリ！ こりゃ、今年のアカデミー賞候補の1番手となることまちがいないし！

マトボ共和国とは？ またその大統領は……？

この映画に登場するアフリカのマトボ共和国は架空の国だが、その大統領がエドモンド・ズワーニ (アール・キャメロン)。中東のパレスチナ VS イスラエル問題やアフリカの部族紛争問題になると日本人にはチンプンカンプンで、その本質の問題点についてサッパリわからないものが多い。私もよく知らないが、パンフレットには『『ザ・インタープリター』を巡るアフリカの現実』と題して、馬場広信氏が「1. ズワーニのモデル＝ムガベ大統領」「2. ルワンダー→コンゴの部族虐殺」を解説しており、これを読めばアフリカ情勢の大筋が理解できる。

民族紛争や部族紛争はどこの世界でも必然的に存在するものだが、アフリカで発生した部族紛争とそれに伴う大量虐殺、あるいはテロ等の問題への対応については、戦後、国連が大きな役割を果たしてきた。2003年のイラク戦争は国連決議

にもとづく戦争なのか、それともアメリカを中心とした有志連合による戦争なのかという議論は記憶に新しいところだが、国連は常に数多くの問題を抱えてきたわけだ。平和な国ニッポンが戦後60年間継続してきたことは事実だが、それはむしろ例外で、アフリカを始めとする多くの国々においては、今なお生々しく悲惨な現実が至るところにあるということを忘れてはならない。数日後に国連で演説を行うことが予定されているズワーニ大統領の演説内容は、大量虐殺が報じられているマトボ共和国にそんな事実は存在しないことを表明するもの。しかし、それは本当なのか？ 国連でのそんな演説は本当にできるのか？ この映画は、こんな現実的（？）かつ重大な社会問題をテーマとした本格的な社会派ドラマだ。

複雑なシルヴィアのキャラクターを見事に！

この映画の主人公シルヴィア・ブルームは、これまでのハリウッド映画には登場したことがないような複雑なキャラクターの女性。そしてこれを演ずるのは、私が1番好きな女優ニコール・キッドマン！ シルヴィアはマトボ共和国生まれだから、その母国語であるクー語を話すことができる。5年前から国連で通訳（インタープリター）として働いている彼女は国連の理念に共鳴しており、言葉を正確に翻訳することによって国際平和に貢献したいと真剣に考えていた。そしてマトボ共和国の大統領であるズワーニに対しても全面的な信頼を……？

しかし、実はシルヴィアの両親や妹はズワーニの仕掛けた地雷によって殺されていた。そして兄のサイモン・ブルームは……？ さらにシルヴィアの恋人であったゾーラもズワーニ大統領の圧政（？）によって非業の死を……。そんなシルヴィアの過去は、スリリングな場面展開の連続の中、少しずつ明かされていく。

こんなシルヴィアが、誰もいないはずの通訳ブースの中で、偶然耳にしたのは「先生は生きてここを出られない」という怪しげなクー語での会話。先生とは誰？ また、その意味するものは……？ そしてシルヴィアはこれをどう理解し、どのように行動していくのか？ そして最後にはどのような結末を迎えるのか？ 決して緊張感が途切れることがないまま、観客の注目を集め続けるこんなシルヴィアの役柄を見事に演じているニコール・キッドマンに対して、またまた大きな拍手を送りたい。

もう1人の主人公、ショーン・ペンとは？

『ミスティック・リバー』(03年)でアカデミー賞最優秀主演男優賞を獲得したショーン・ペンは、この映画ではズワーニ大統領のシークレット・サービスを指揮する責任者トビン・ケラーとしてこれも見事な演技を披露している。シークレット・サービスの仕事は、まずは人を疑い、何事も信用しないこと。そして、何事もその裏付けとなる資料を集めること。考えてみればイヤな(?)仕事だ……。

ケラーがシルヴィアから、「国連で演説するズワーニ大統領の身に危険が……」と言われた時、まずその話を疑ってかかったのは当然。まして身辺警護が必要と判断されたシルヴィアの身を守るため、プロとして懸命の努力をしているにもかかわらず、シルヴィアに勝手な行動をとられたのではやってられないのは当然……？ そのうえ、シルヴィアが断片的な身の上話しかせず、隠し事がいっぱいありそうなこと(?)も気に入るはずがない。そんな、いつも「反対側」に立って行動しているケラーとシルヴィアは、再三衝突をくり返しながらも、お互いの義務をそれなりに果たすべくベストを尽くしていたが……？

反ズワーニ大統領の急先鋒は？

ズワーニ大統領が国連で計画している大量虐殺否定演説を阻止しようとするのは、平和主義者のゾーラとアメリカで亡命生活を送っているクマン・クマン(ジョージ・ハリス)の2人。それはなぜか？

アフリカのマトボ共和国を巡る政治情勢そのものが難しいうえ、物語の進行が非常にスピーディーなため、物語のポイントとなる人物の名前やその役割を理解するのは結構大変で、途中ではわからないこともたくさんある。しかし、そこは脚本の完成度が高いこともあって、注意深くスクリーンを見ていれば、どこかの時点で必ず物語の意味や人物像がつながってくるようになっていく。もちろんそれは一生懸命に緊張感をもってスクリーンを観ていることが前提だが……。

シルヴィアは、かつて民族独立運動の指導者として輝いていたズワーニ大統領の若き日の姿を知っていたが、その彼は今や独裁者として、その後はマトボ共和国で大量虐殺を続けている狂気の大統領……？

そんなズワーニ大統領に国連の大舞台で大量虐殺否定演説をさせるわけにはいかない。そう考えた反ズワーニ勢力はたくさんいたはずだ。そしてシルヴィアの兄サイモン・ブルームもひょっとして、アメリカ亡命中のクマン・クマンらとともにズワーニ大統領暗殺計画に関与しているのでは……？ そう考えてシルヴィアが動き回ったとしても何ら不思議ではない……。ところが、やっとシルヴィアがバスの中で接触したクマン・クマンの乗ったバスは、一瞬のスキに大爆発！ さあ、これはエライ大失態だが……？

いよいよ国連での演説が……？

今日はいよいよズワーニ大統領の演説の日。議長に促されて演壇に立ったズワーニ大統領には、シークレット・サービスをはじめCIA、FBIなどが暗殺計画を阻止するため可能な限りの警備体制をとっていた。しかし、この演説台を見下ろすある場所では、ある人物によって、ある行動が次々と……？ その結果は……？

さらになるドンデン返しは？

映画はそれだけでは終わらない。ズワーニ大統領の暗殺は果たして成功したのか、それとも失敗に終わったのか？ そしてその時、シルヴィアは一体どこにいたのか？ さらに大統領のシークレット・サービスの責任者であるケラーは、一体どんな役割を演じていたのか？ そして、お互いにまったく違う岸に位置していると考えていたケラーとシルヴィアは、いつか同じ岸の上に2人して立つことができたのだろうか？ 見事に練り上げられた脚本の下で、2人の名優によって展開されるスリリングな展開を心ゆくまで楽しもう……。

国連改革と日本の安全保障理事会常任理事国入りを考えよう

この映画は、映画史上はじめて、ニューヨークのマンハッタンにある国連本部に映画のカメラが入ったことで有名となった。たしかに、国連の会議場や通訳ブースあるいはその警備体制などは興味深いもので、そういうものを観ることができるのも映画の楽しみの1つ。

国連（国際連合）は第2次世界大戦後、1945年に、戦勝国であるアメリカ、イ

ギリス、フランス、ソ連、中国を中心として結成されたものだが、加盟国は設立時の51カ国から今や191の国と地域に広がっている。2003年3月のイラク戦争開始前におけるアメリカ、イギリス VS ソ連、フランスの対立(?)のように、国連の常任理事国同士の利害対立や紛争地域への介入のあり方をめぐって厳しい国際間の駆け引きが展開されてきたのは当然だが、近時の国連のテーマは「国連改革」。その内容はここでは述べないが、これに付随して近時は、日本の安全保障理事会の常任理事国入りが重要なテーマとなっている。そしてこれは、今年4月末に展開された中国での「反日デモ」の1つの背景となっており、8月15日そして小泉総理の靖国参拝にむけて一層緊張感を増すことだろう。また、国連の国際平和維持活動や国連軍への参加と日本国憲法9条との関係も近時の重大な論点。このような、戦後60年を迎えた日本国と国連との関わりあいについても真剣に考えながらこの映画を観れば、より一層、興味が湧くし、勉強にもなるはずだ。

シンプルな英語大スキ!

弁護士の仕事を31年間やっていていつも思うことは、日本語のまどろっこしさとその日本語を語る日本人の悠長さ。それが日本文化だといえそうだし、それ自体が悪いわけではないが、こと法的紛争処理や法廷における証人尋問、あるいはその打ち合わせという場面では、ハッキリとこれは大きなマイナス要因。「短い言葉で言いたいことをズバリと話せ」と急に言われても、日常的にそういう経験をしていない日本人には所詮ムリな話……? 質問に対して端的に答えず、前提事実や周辺の事情を語ったり、結論をいう前につまらない弁解をしたり、さらにはムダな気候の挨拶を試みたり、とにかく日本語や日本人の日本語のしゃべり方にはムダがいっぱい……? これに比べると、英語は結論が先。これは文法上、主語の次に動詞がくることも大きく影響しているはずで、この文法は中国も同じ。だからハリウッド映画の法廷モノや尋問モノ(?)は迫力があって面白いわけだ。この映画でも、何らかの目的をもって動いていることが明らかなシルヴィアやシークレット・サービスのリーダーであるケラーは、いかに効率的かつ適切に時間を使い、スタッフの力を結集していくかを考えているから、電話や面と向かっての会話、そして指示する時の会話はテキパキとしていてすべて手短か。

そうだからこそ、これだけスリリングかつスピーディーな展開でも、ストーリーが読めるわけだ。そんな日本語と英語の比較、すなわちそれは日米文化比較そのものだが、そういう視点もすごく大切だと私は確信している。

社会派ドラマづくりの底力に感心！

ハリウッドは今『ザ・リング2』（05年）や『インファナル・アフェア』3部作（02年～03年）などのリメイク映画と、『バットマン』（89年）や『スパイダーマン』（02年）などのアメリカン・コミックを原作とした映画が増えているが、これは実は由々しき事態。なぜなら、前者は企画不足ということだし、後者は興行成績優先で安全策に陥っているということだから。これでは、いずれネタが尽きて観客数が減少することは目に見えている……？ 他方、「韓流ブーム」が日本でこんなに広がり、かつ継続するとは誰もが予想しなかったこと。このように、一体何が観客に喜ばれヒットするのは容易にわかるものではない。したがって映画制作やその公開はかなりバクチ的な要素があるのはたしか。

しかし、アメリカのハリウッド映画には、『インサイダー』（99年）などの私の大好きな「社会派ドラマ」というジャンルがあり、それは必ず一定数の映画ファンの支持を得てきたはず。そして、今年ハリウッドの社会派ドラマの最先端をいくのが本作。複雑な政治問題をテーマとしながら、スピーディーな展開の中、よくもここまでまとめあげたものだと感心。この潮流を消すことなく、時々ハリウッドの社会派ドラマづくりの底力を日本人観客に見せつけてほしいものだ。

アカデミー賞有力候補まちがいなし！

アカデミー賞レースが毎年いつ頃からスタートするのか私は知らないが、この映画は作品賞、監督賞、主演男優賞、主演女優賞の4つの分野においてその先頭を走りはじめたことはまちがいなし！ 『キングダム・オブ・ヘブン』（05年）や『コンスタンティン』（05年）もその候補の1つになるだろうが、私としてはこういう社会派ドラマに映画の価値をより高く認めてもらいたいと願っている。来年3月の予想はまだ早すぎるとわかっているが、現時点でこの映画がアカデミー賞有力候補まちがいなし、とだけは断言しておこう。 2005(平成17)年5月24日記